

## 武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

## 大歡喜

——ルカ伝第1章26～38節、2章8～35節——

1968年12月22日

小池辰雄

一方的な恩寵 新しい次元の世界 汝の言のごとく我に成れかし 大歡喜を福音する どん底の生まれ方 救い主 御霊による新生 同時性・同質性 受けるか、受けないか 言い逆いを受くる徴

## 【ルカ1・26～38】

26 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女<sup>おとめ</sup>のもとに、神より遣さる。27 この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁<sup>いいなづけ</sup>せし者にて、其の名をマリヤと云う。28 御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30 御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31 視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32 彼は<sup>おおい</sup>大ならん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34 マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35 御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。

## 【ルカ2・8～35】

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、はその徴なり』13 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き所に



は栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』<sup>15</sup>御使等さりて天に往きしとき、牧者<sup>ひつじかい</sup>たがい<sup>ひつじかい</sup>に語る『いぎ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起れる事を見ん』<sup>16</sup>乃<sup>すなわ</sup>ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒<sup>みどりご</sup>とに尋ねあう。<sup>17</sup>既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたらば、<sup>18</sup>聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。<sup>19</sup>而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。<sup>20</sup>牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。

<sup>21</sup>八日みちて幼児に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。

<sup>22</sup>モーセの律法に定めたる潔の日満ちたれば、彼ら幼児を携えて、エルサレムに上る。<sup>23</sup>これは主の律法に『すべての初子<sup>ういご</sup>に生るる男子は主につける聖なる者と称えらるべし』と録されたる如く、幼児を主に献げ、<sup>24</sup>また主の律法に『山鳩一對あるいは家鴿の雛二羽』と云いたるに遵いて、犠牲<sup>いけにえ</sup>を供えん為なり。<sup>25</sup>視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。<sup>26</sup>また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、<sup>27</sup>此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例<sup>しきたり</sup>に遵いて行わんとて来りたれば、<sup>28</sup>シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、<sup>29</sup>『主よ、今こそ御言に循いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。』<sup>30</sup>わが目は、はや主の救を見たり。<sup>31</sup>是もろもろの民の備え給いし者とを、其の父母あやしみ居たれば、<sup>34</sup>シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。』<sup>35</sup>――剣なんじの心をも刺し貫くべし――これは多くの人の心の念の顕れん為なり』

### ● 一方的な恩寵

今年の集会の恵みを今日この集會に結集して、本当に皆さんが新しく特別なクリスマス、降誕節を、一人ひとり何らかの意味においてここに新しい一歩前進を――前進するためには何か来なければ前進できない――その前進の土台として、原動力としてこの降誕節を我々が迎えるという、気構えてこれに立ち向かっていただきたいと思います。とにかく、自分自身がごまかしのない世界に本当に入っていただきたい。私も入ります。そういうことで、ひとつ進んで参ります。

まず、ルカ伝1章26節。マリヤに何か新しいことが起きまして、



26 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。27 この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。28 御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』

「恵まるる」というのは、全く上からの一方的な恩寵の事態です。すぐあとに、

「主なんじと偕に在す」

という言葉が続いています。そうしたらば、

「恵まるる者よ」

と言われたから、マリヤは喜んだかと思つたら、

「心いたく騒ぐ」

と書いてある。

29 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30 御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。』

31 視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32 彼は  
大ならん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』

と。御使が現れる。もうそういう事態が私たちに簡単に想像のつかない事態です。

私は実は、昨日夢の中で、この朝の集会のある面を示されています。そういう、夢の中で示されたりすることが、時々私はある。

御使がはつきりと、

「マリヤよ、懼るな」

と。神の恵みは、普通考えているような次元ではないわけです。次元のちがうものがある。もし、次元の同じものなら、これは福音の世界ではない。始めからそのことが分かっているのですから。マリヤもそうだった。だから、恐がる。「心いたく騒ぎ」というでしょ。「懼れるな」と。

私はこの集会を開いてもう28年か。途中から少し白波を蹴立てて進みだしたらば、この通りに恐れて、この集会から出ていった人が幾人もある。始めのうちはちよつと居るかと思つたら、

「いやとてもこれは」

なんていうわけで出て行く。まことにこれは惜しい。どこの教会へ行つたつて、それはダメですよ、そういう出かたをしたのでは。どこかの教会へ行つて落ち着くでしょうけれども、その落ち着きは本当の落ち着きではない。



## ●新しい次元の世界

福音の世界は、次元のちがった世界に入れることなんです。新しい次元の世界に入ることが、それが福音の福音たることで、そうでなければ福音ではない。そうでなかったら、それは何か聖人君子の教えくらいのものだ。だから、私は「キリスト教」なんていう「教」の字を使うのは嫌いなんです。どこまでもこれは福音です。

## 「懼れるな」

とは

「恐いことはないよ」

ということですよ、もうひとつ言えば。

「恐くはないよ。恐くない世界に入れてやるよ」

と。だから、福音に立ち向かう人は、頭からもうバカになって信頼してかからなければダメです。

「どうだろうか、こうだろうか」

と考えて、「これはちよつと自分には合わないから」なんてね。合わないに決まっているんです。合うものなんかは、私たちは合わない。

大体始めっから、

「ヤソ教は」

なんていうわけだね、私は小学校時代には敬遠して、私の兄は内村先生の集会へ行っただけでも、ひとつもそれに関心が起きない。

「宗教なんてものは」

なんていうわけだね。けれども、兄を見ると、何かちがっている。始めから合うなんて言ったら、これはおかしいんだ、本当は。誰だって福音は始めから合わない。ところが、合うような福音を伝えているからね、

「あつ、これはいいな」

なんて。ちつともよくはない、本当は。

恐がるような福音が、これが本ものの福音です。どうぞ、皆さんは、そういうことで、新しく来た方に、

「ちつとも恐いことはない。実に楽しい世界です。始めはちよつと次元がちがうから、おかしく思えるかもしれないが、そんなことではない。この世界でなかったらもういられません、ということになりますよ」

ということを、どうぞ、新しい方に懇ろに言ってください。私一人ではダメだから。

「あそこの集会へ行くと、どうもなにかみんなつんとしていて」

なんて、そんなのは冗談じゃない。喜びの世界です。だから、私は今日は「大歓喜」と題に書いた。一人びとりが大歓喜の人で、





「あそこへ行ってみたら、何かしらんけれども、うれしくなっちゃった」なんてね。それならいいです。とかく、都会の人間というのは澄ましてしまっただよな。どうぞ、田舎みたいになつてください。信州の小諸の集会はみんな本当にニコニコしていらつしやる。あれはまた田舎のよきなんです。本来、そういう世界ですから。私の顔が少し恐いのだから何かしらんが、ちつとも恐くはない（笑）。

### ● 汝の言のごとく我に成れかし

「マリヤよ、懼るな」

と。恐いことではないと。これは大変な恵みなんです。そこらにある恵みとはちがうんだ。いや本当にそうです。これは空前絶後の恵みですから。けれども、常識に合わないものだから、マリヤはやはりどうもよくわからない。

<sup>34</sup> マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、

「知る」という言葉は旧約聖書にもあるとおり、「アダム、エバを知る」という、ああいう言い方をする。

如何にして此の事のあるべき』

子どもの生まれるはずはないんだと。はっきり、そういうことが書いてあるからおもしろい。

<sup>35</sup> 御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力ちからなんじを被わん。

聖霊のことが語られて、一番先に「至高者の能力」ときたです。この聖霊は至高者の力を持っている。至高者の力を持っている聖霊。いいですか。至高者の力のない聖霊なんでものは聖霊ではない。まあ、私みたいなやつが何だかしらんけれども、力を得てしまったのは、この聖霊が来てしまつてからです。それははっきりしている。いわゆる無教会時代とそのことはちがつてしまった。これは次元がちがう。

そして、不思議な力がお前に臨んで、

此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。

「さあ、処女降誕というものがあるだろうか、どうだろうか」

と、昔からさかんにやつている。そんなことは議論することはない。次元のちがつた、我々の知情意の判断を越えた世界のことが語られているのに、こつち側の次元で議論したって何が始まるか。もう、私は聖書の前に降参するだけです。降参したら、その世界に入ったら、

「ああそうでしょう」

と楽に受けとれるようになる。どうぞ、皆さん、この大歡喜に入る前には降参しなくては。この世の悲しみとか喜びとか憂いとかいろいろありますが、どんなにこの世の喜びが素晴らしくても、福音における喜びとは質がちがう。現在のあなたはいろんなことが気にかかっているかもしれない。けれども、その気にかかっていること、悲しみや憂い、そんなものも問題にならない。



36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』

神さまの言というのは我々の言葉とはちがう。神の言は力ある言です。神の言は神の霊と離すことができませんから、神の言は力を持つている。だから、

「能わぬ所なし」

という。言が意味だったら能わないが、しかし、言は力であるから能わぬことがないんです。聖書の言は力を持つているから、能ぬことなし。キリストの言を受けとっているのに力が来なかったら、それはキリストの言を受けとっているのではない。それはキリストの言の意味を受けとっているだけだ。意味の話ではない。言の内実そのもの。そのものは必ず力を持つている。だから、聖書を読んだら、もう楽しくてしょうがない。力がくるから。万事これ力の世界です。物騒なことを言うけれども、暴力ではない。

38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』

マリヤの38節のこの言葉、これは絶対にあなたの方の胸にしっかり刻んでくださいよ。このマリヤの一言は聖書の中で最も大事な信仰の言葉のひとつです。

「視よ、われは主の婢女なり――男だったら、視よ、われは主の僕なり――」。

汝の言のごとく、我に成れかし」

これ以上の祈りはない。これは最高の最深の祈りです。

「汝の御言の如く、御意の如く、我に成れかし」

と言う。キリストは、

「汝の御意を成させ給え」

と言いました。あそこに、

「私を通して」

という言葉が隠されていると私は言いました。その言をマリヤが実は言っていた。

「汝の言の如く、どうぞ私に成ってください」

とマリヤがはつきり言っている。さすがに、イエスのお母さんです。このマリヤの一言を瞑想して深く祈ったならば、あなた方はもう福音の世界の突破ができるんです。もうたまたまです、私はこういう言葉は。

「視よ、われは主の婢女なり。汝の御言のごとく、我に成れかし」

と。

「自分はとてもあなたの御言の如く成れません。けれども、どうぞ、あなたの御言が、力ある御言が私において成就してください。私を変質変貌させてください」  
と、自分を投げ出しているんです。



## ●自分を神の前にそのまま投げ出す

## 「我に成れかし」

と言つて、澄ましているのではない。澄ましたつて、成れはしないですよ。成れない者が成るんだから。成れない者が成るためには、自分が投げ出せられなければ成れない。はつきり、自分というものが、自分の性格、才能、それが何であろうとかんであろうと、そんなものは問題にしない。これを本当に投げ出す。

## 「私はあの人よりもこうだあだ」

と、そんな比較はなにも要らん。神さまとの関係には、比較研究は絶対に禁物。ただ自分だけが本当に神の前にそのまま投げ出すことだけ。そのことをはつきり言い切らなければ、これは福音にならない。

## 「私はまだ福音を聞いてから何か月だ」

とか、

## 「福音を聞いてから何年だ」

とか、そんなことも問題にならない。今日、今、即刻、この時、この場において。福音の世界はただそれだけです。そういう瞬間において、本当に永遠の質を持った瞬間を、自分が本当にそれに立ち向かつて、自分を投げ出すところ。そこが本当に一刀両断するような瞬間です。自分の歴史を両断するような瞬間です。そういうような受け方をしないで、何が福音か。いいですか。

このマリヤが、

「視よ、私はあなたの婢女です」  
はしため

と。「婢女」というのは、その主人の言うことに絶対に服従です。「僕」というのは、絶対に信頼している者です。イエスはヤーヴェーの僕、神の僕。パウロはキリストの僕として自覚していた。

今、一般に言われているところの民主主義だとか自由だとかは、何を言っているかと言いたくなる。まず、人間がこの場に立たないで。日本はこんなことをしていたら亡びますよ、藤井先生が言ったとおり。経済的にどんなに隆盛になっても、日本人の魂はサタンの虜になつてゐる。一部の学生なんかはとんでもない。しかし、一部の学生にかぎらない。小学校から大学に至るまで教育はもうダメです、こんな教育をしていたのでは。魂のことが本当にお留守になつてゐる。私はD大学の授業でもそのことを叫びます。それで悪ければいつでも辞めるよと言つてます。私たちはもはや、御名のこの真理を隠しているわけにはいかん。ごまかすわけにはいかん。

## 「視よ、我は主の婢女である。どうぞ、あなたの御言の如く私に成就してください」

と、挺身して自分を投げ出している。必ず成りますと。もう生れつきのどうのこうのと、そんなことではない。私たちは本当に、あなた方一人びとりは本当に、今日このクリスマス



スを、このマリヤのこの一言を本当に受けとって、これを自分のはらわたの告白として進まなければ、この降誕節を迎えたことにはならない。本当にお腹の底で

「然り、アーメン」

と言ってますか。

「視よ、我は主の婢女である。汝の言の如く、どうぞ、成ってください。あなたの御言が、どうぞ、私の中で成就してください。私は献げています」

と。これは力が来ます。御霊の本当の力が来ます。そうしたら、もういい。皆さんはもうその境地にかなり既に入っていると思いますが。どうしても、そこは私は読まざるをえないので、このところをまず申したわけです。

## ●大歓喜を福音する

次に2章に行きます。天下の戸籍があつてどうのこうのなんて書いてありますが。8節、

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、

イスラエルの民は、詩篇23篇にあるように、神を牧者とし自分たちをその羊の群として自覚していた民です。その牧者がそこに居たというのは非常にふさわしい状況です。

9 主の使その傍らに立ち、

ここにも「主の使」とある。私たちのこの集会でも、あるクリスマスで本当に天使が霊的に現れた時があつた。ときたまそういうことをなさる。その時、皆さんの後に天使が立った。目には見えなくても、本当にその世界に入ると、降り立ってくるというわけです、神の御意ならば。

主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。

何かしらんが、霊光が、霊的な光がそこを包んだ。それだものだから、

「おかしいな、夜にこんなに明るくなつてどうしたのだろう」

と。レンブラントの絵にもありますとおり。いたく懼れた。ここでも懼れてしまった。恐がる。これは次元がちがうから。

幽霊が出てきても恐れるんだ。ちよつと次元のちがつたやつが現れる。けれども、こつちがその霊的次元に入っていれば、幽霊はちつとも恐くない。向うはむしろ困っているのだから。

「どうしましたか？」

と聞いてやる。

「そうですか、お気の毒ですね。それでは祈りましょう」

なんて、幽霊と一緒に祈る。そうしたら、幽霊が喜んで姿が消えてしまう。聖霊にあれば、もう恐いものはなくなってしまうわけです。

「シャーローム」「平安」





という言葉は、神の力を着せられるところの事態なので、ただ安らかという字ではない。神との関係が本当に立つて、そこに力ある事態があることを「平安」「シャーローム」という。

10 御使かれらに言う『**懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜**<sup>よろこび</sup>の音信を我なんじらに告ぐ、

大歡喜の音信です。「大歡喜を福音する」というような言い方です。私は前に『曠野の愛』の26号に書いた「言い逆らいの徴」という文章は、あれは清瀬で集会をした歴史的なクリスマスです。

今日は、その「大なる歡喜の音信」の、その「大歡喜」と題したわけです。ルターはこの福音のことを

「歡喜の叫び」

と言いました。福音のことをさすがにルターは「歡喜の叫び」と言った。さすがにルターですね。福音は歡喜の叫びである。詩篇の中にもよくこの「叫び」という言葉が出てきますが、今のクリスチャンの祈りは本当に叫びの祈りなんていうのはあまり聞かない。

「体裁がわるい」

なんて。なにも体裁わるくない。あるときは、本当に叫ぶような祈りをしなければいけないはずなんです。また、静かな祈りであっても、その質は叫びでなければダメなんです。そういう歡喜の叫びが福音である。

「大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ」

というのは、直訳すれば、

「我はなんじらに大歡喜を福音する」

ということですよ。

### ● どん底の生まれ方

11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主<sup>すくいぬし</sup>うまれ給えり、これ主キリストなり。

12 なんじら布にて包まれ、馬槽<sup>うまぶね</sup>に臥しおる嬰兒<sup>みどりご</sup>を見ん、是<sup>こ</sup>の徴なり<sup>しるし</sup>』

「徴」「セイメイオン」という字はもともと「天来の示し」という言葉です。啓示的なものです。天来の示しがこの「徴」「セイメイオン」という。「馬槽に臥しおる嬰兒」がなぜ徴か。何も徴でも何でも無い。普通の赤ん坊だよね。およそ徴ならざるようなものに本当の徴が隠されているわけだ。誰も顧みないわけです。宿屋が一杯で部屋がないから、仕方がないから馬小屋に入つて、そして月が満ちたものだから、そこで馬槽の中に生まれたという、どん底の生まれ方をした。

世のどん底を担う人は生まれ方がどん底である。だから、この嬰兒が徴ではない。馬槽に生まれたということが本当はその徴なんです。馬槽の中に、人間らしくない生まれ方をしたような生まれ方。これはどん底の生まれ方をしたのが、これが本当の徴である。王宮



に生まれたのではない。靈界の王者は一番惨めな姿で生まれた。当時、アウグストゥスというローマ世界帝国の皇帝がいた。そこに靈界の王者、「ザ キング オブ ザ キングズ」（王達の王）が最も惨めな隠れた生まれ方をした。けれども、これは靈界には実に明らかであるから、この不思議な現象が起きている。星に導かれて東から三人の博士たちが来たということもある。

<sup>13</sup> 忽ち<sup>たち</sup>あまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、<sup>14</sup> 『いと高き

所には栄光、神にあれ、地には平和、主の喜び給う人にあれ』

「人にあれ」と書いてありますが、

「人にやって来た」

と私はむしろ完了的に訳したい。

「現にいと高き所には栄光が神に現れ、地には平和が主の喜び給う人に現れた」

と。「いよいよそうであれよ」という響きは出てきますけれども。現にもうその現象が現れているんだから、

「もう栄光が現れ、地には平和が主の喜び給う人にやって来たのだから、さあさあ、

悦びなさい」

ということ。しかし、この悦びが実はわからないんです、どういう悦びなのか。言われてみても、何を悦ぶんだか。ちょうど今の普通のクリスマスは、何だかしらないけれどもちよつとうれしそうだなって、そんなうれしきです。我々が今日迎えているところのこの悦びはそんな悦びではない。大歡喜と言ったのは、ただ度合いが大きいのではない。質がちがうんです、この大歡喜というのは。喜びの質がちがう。現実がどのような状態であろうとも、この質のちがった喜びはいかなる状態にもやってくる喜びです。そうでない地上の喜びは、その情況によつて、その喜びの大きさが大きかったり小さかったり中くらいだったり。そうではない。こちらの状態如何にかかわらず、この大歡喜はそれに打ち勝つ。一切を担ってしまうような、包摂してしまうような、貫いてしまうような、そういう歡喜です。

## ●救い主

旧約聖書のゼカリヤ書9章に、

「<sup>9</sup> シオンの女<sup>むすめ</sup>よ大に<sup>おお</sup>喜べ、エルサレムの女<sup>よば</sup>よ呼われ、視よ汝の王汝に来る。彼は正義<sup>ただ</sup>しくして救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子<sup>こ</sup>なる駒に乗るなり。<sup>10</sup> 我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶<sup>た</sup>ん。戦争<sup>いくさ</sup>弓も絶るべし。彼国々の民に平和を諭<sup>さと</sup>さん。その政治<sup>まつづいて</sup>は海より海に及び河より地の極<sup>はて</sup>におよぶべし。」（ゼカリヤ9：9～10）

このゼカリヤ書9章9節というのは、正に靈界の王者であるキリストの預言の言葉として不思議なところですよ。



「シオンの女よ、エルサレムの女よ」  
というのは、

「シオンの市民よ、エルサレムの市民よ」

ということ、シオンもエルサレムも同じことです。既に旧約でそのように、「喜べ」と言  
つて預言し、一切の戦争的なものはそこで止み、そして本当の平和を来らしめるところの  
義の王者であり、義のゆえに勝利である。しかもまた、柔和なる人。柔和というのは、神  
さまに対して従順ということ。そういう人が現れるという。ここにも「喜べ」という  
ことがある。普通の喜びとはちがう喜びです。こういう人がやってくるが、これは本当の  
喜びだ、消えることのない喜びだと言うわけです。

ゼパニヤ書3章に、

「<sup>14</sup>シオンの女よ歡喜の声を挙げよ。イスラエルよ楽しみ呼ばわれ。エルサレム  
の女よ心かぎり喜び樂しめ。<sup>15</sup>エホバすでに汝の審きをやめ汝の敵を逐いは  
らいたまえり。イスラエルの王エホバ汝の中にいます。汝はかさねて災禍に  
あうことあらじ。<sup>16</sup>その日にはエルサレムに向かいて言うあらん、懼るるな  
かれシオンよ汝の手をしなえ垂るるなかれと。<sup>17</sup>なんじの神エホバなんじの  
中にいます 彼は拯救を施す勇士なり、彼なんじのために喜び樂しみ愛の余り  
に黙し、汝のために喜びて呼わられたもう。」(ゼパニヤ3・14～17)

ここも非常に著しいところです。この二カ所は特にクリスマスの預言にふさわしいところ  
として受けとられるところです。これは歡喜、讚美です。喜び歌えと。歡喜は同時に讚美  
となりますから。ここにも「懼れるな」と書いてある。なにも恐いことはない。

それから、イザヤ書35章10節、

「<sup>10</sup>エホバに贖いすくわれし者うたうたいつつ帰りてシオンにきたり、その首  
にとこしへの歡喜をいただき樂しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげ  
きとは逃さるべし。」(イザヤ35・10)

なぜ喜ぶかというところ、このイザヤ書にはつきり書いてある。「贖われたる者」と書いてある。  
救い主が現れて、なぜ、私たちが喜ばなくてはいいかんのか。それは「救い主」と言うからには、  
本当の救いがくるからです。いかなる人も、どんな人間も人ひとりのことを救うことがで  
きない。救い主、贖い主が現れた。

### ●御霊による新生

救いとは即ち、罪からの贖い、をすることである。罪から贖い、そして今度は、永遠の生  
命を与えてくれるもの。もうひとつ別な言葉でいうと、御霊を注いで新生をさせるもの。「十  
字架と聖霊」の事態です。これが我々の、なぜ喜ばないではいられないか、なぜ次元のち  
がう喜びであるかは、ここではつきりするわけです。即ち、罪の贖い。これは誰もできない。





キリストでなければ。罪なき者、神の御意を、

「主よ、汝の御意をどうぞ我に成させ給え」

と、完全にそれを成してしまった。あのマリヤの祈りをその子イエスは完全に自分で成就してしまった。マリヤは一時はよかつたけれども、やはりマリヤはマリヤだからダメだよな。けれども、キリストはその母の祈りを自分の祈りとして、これは本ものが本当にやってしまった。これが神の子。即ち、贖いをする力を持つている。キリストだけが贖いの力を持つている。その義その愛は贖いの力を持つている。また、その実存そのものが贖いの大業を遂げれば、必然、永遠の生命体として顕れざるをえない。霊体をもつて顕れざるをえない。それが復活体というものです。復活というのは、ただ息を吹き返したのではない。

その永遠の生命を、その質的存在の中に本来持つていたところの永遠の生命をもつて遂に貰った。この霊生の勝利を、この霊生を実質的に与えてくれるものが御霊です。私たちは復活節を迎えようが、降誕節を迎えようが、十字架の金曜日を迎えようが、ペンテコステを迎えようが、帰するところはみな同じです。これなくして、私たちがなぜ大歡喜であるか。馬槽のキリストは、大歡喜が約束されているところの事態なんだ。まだ大歡喜そのものは、その事態においては成就してはいないけれども、これは大歡喜を約束しているところの徴だから。私たちの中にキリストがもう御霊の事態として現れた。

その私たちの中にこのキリストの御霊を本当に受けとって、

「もういいです、自分はいつでも。もう何も考えません」

と。過去がどうであろうと、現在がどうであろうと、未来がどうであろうと、いいです。もうそんな相対的な時限的なものは乗り越えてしまふ。実はもう永遠の中に、この相対的な時限次元にいながら――人生は地上ではせいぜい百年くらいだ。とにかく、人生の相対的な時限の長短にかかわらず――もう私たちは永遠の中にある。永遠というのは時間の長さを言っているのではない。これは時の質です。滅びざる時を持つている。

瞬間の中に永遠の質を持つている。それはどこからくるかというと、聖霊を受けるまでは、この永遠がわからない。聖霊がくるまでは、この永遠というものがどういうものかわからない。ただ想像して無限に長い時かと思う。そんなものは想像したってどうにもならん。御霊というものは滅びないんだから。滅びない霊なんだ。滅びない霊がくれば、もう永遠の質がすぐわかるわけです。

だから、死んでも死にませんよと。まず聖霊というものはなんとまあ素晴らしいものであるか。これはとても説明なんかできない。どんなに説明しても。聖霊のことを本当にものの凄い一巻の書を書いたっていいくらいです。ところが、未だかつて世界の神学者に一人もない。それだけ聖霊に対して打ち込んで論じているようなものは。私は神学の新しい本が出ているのをちよつとのぞいて見るんだ。大体、聖霊のことは書いてあるか書いてないかだね。あつても、ちよこつとつけたりですよ、みな。それくらい神学者がダメな





んだ。だから、パウロやペテロやヨハネが嘆くよ、

「一体何の神学か。そんな神学はよせよせ」

と。パウロなんかは、神学なんて言わなくなつて、もう重厚なものを持っている。学ではなくて、その事態そのものを。

このキリストの降誕において、キリストが我々の中に、同じ次元の中に降りてきた。どん底の担いの徴、その馬槽の生まれ方をもつて降りてきた。このキリストはイエスという身体に受肉した。これは霊の結晶体です。御霊の結晶体。もう12歳のキリストには、他の坊さんや学者どもはかなわない。聖霊の角度からものを言っているから。だから、キリストが受肉して現れたら、このキリストを私たちが私たちの存在の中に受肉させなければ。この御霊のキリストが受肉してこなかったら、また御言が受肉してこなかったら、この降誕節を迎えたことにならない。今、実にそのことを私たちは端的に受けとりつつあるわけです。

### ●同時性・同質性

今、旧約の預言でもあつたとおりに、「喜べ、喜べ」という。そして、ことにイザヤ書においてこの「贖われたる者」である。贖いを約束され、実に私たちはもう降誕から十字架・復活まで、既にもうこれは成就されている事態だから。降誕を祝うと同時に、十字架・復活・昇天・聖霊降臨まで全部ひつくるめたイエスというものをこの嬰兒みどりごにおいて見なかったならば、何もならない。嬰兒において、

「せんだん ふたば梅檀は双葉より芳しい」

というが、この嬰兒において既にそのことがはつきり受けとられている。小さな子どもを見ても、目や耳や鼻や、お母さんやお父さんに似ている。ちゃんと将来の形までそこに出てしまっている。いわんや、イエス・キリストにおいてその成されるべきことはちゃんと約束されたものを私たちはそこに見るから、直ちにこの贖われたる恩寵を、全イエスが完了したところのその恩寵を受けとる。霊のキリストが受肉したその事態を私たちが喜ぶことは、同時に私たちの中にその御霊のキリストが受肉されることを喜ぶことでなければならない。

復活の喜びもまたそうです。復活のキリストを受けとることが同時に、私たちがキリストにあつて甦ることの喜びをそこに体験しなければならない。聖霊降臨を祝うこともみな同じです。全部、同時性である。また同質性である。即ち、同時的、二千年前も今も同じである。また、同じ質のものが現象している。福音は、そういった次元の福音を私たちが同質的に受けとらないでどうしようかと。もしそうでなかったら、つまらないですよ、正直、いいですね。皆さんは、

「今日この時に、確かにもう自分というものを考えなくなりました。そんなことはもうどうでもいいです。問題は、このキリストが、どうぞ、私に成ってください」



と。キリストの本願は、成ろうとしているのだから。

「お前の中に入っていく。お前は私の中に入れ。そうしたら、必ずそう成るぞ」と。

「はい」

と、もうそのほかに答えようがない。「でも」なんて言うわけじゃない。この「はい」ということでもって、何かしらんが、あいかわらずダメな自分なんかをもらは、いくら引っかけたって、引っかけないながら引っかけないという事態ですよ。いいですか、わかりますか。

「それでも私は」

なんて、なぜ言うんですか。私はダメに決まっているんだから。ダメなものをいつまで見ているんですか。私だって、何年たつても、自分を見たら、「それでも私は」というものが残るんだよ。

「それをすっかり無くしてしまつて、悟りすまそう」

なんて、冗談言うなど。そんなカスはどうでもいいんです。中に本当にちがったものが、永遠的なものが、突破していくものがある。

「ああ、うれしいな」

と。それを本当に内観していく。

「ないかん」には二つ言葉がある。内観、内側に観る。内側にその聖霊の救いの事態を観る。新しき我を観る。また、内側に本当にそれを感じ得ている。内感する。内側に感ずる。観かっ感じていかなくはダメです。そして、それが体現されていく、必ず。必ず体現されていく。どんなに惨めでありましても、必ず体現される。

片一方はどんなに立派そうに見えても、それはダメなんだ、人間的なものは。どんなに立派そうなクリスチャンだって、それはダメだ。神さまの目から見ると、それはメッキなんだ。片一方はまことに惨憺たる姿をしているが、

「いや、あれは本ものだ」

と。神さまに、どうぞ、本ものだといつて喜ばれる人になる。人には、

「どうもダメな野郎だ」

と思われたって。そういつたドラマチックな、内側に本当に立っているもので勝っていく。躓いても転んでも倒れても、前進あるのみ。それで、あなた方は、

「何かしらんけれども、このクリスマスに、確かにこれはちがった。もうつまらない思案はやめた。本当に変わりました。キリストの言が私の中で、言という、霊というキリストの事態が、受肉の事態が、私の霊がキリストの霊を受けて本当の受肉の事態が、展開を始めましたよ」

と言ってくれなくては。本当に無条件です。無条件の事態は、十字架が既に開いているんだから。わかりましたね。それは必ず力を持っている。思われている世界ではないから。



考えられている世界ではない。悟られている世界ではない。福音は必ず力を持っている。

「何かしらんが、うれしくなっていました」

と。そこに初めてこの歡喜がくる。この大歡喜は力を持っているのだから。キリストの力がないような歡喜なんてものは、それは単に浮いた感情にすぎない。どんなにとぼけたような顔をしていても、その奥に本当の大歡喜のじつくり坐った、そういう人になってくださいよ。それはなりますから。聖霊がくれば必ずそう成る。

「ああ、本当にうれしくなっていました」

と。そうしたら、喜怒哀楽を現さないのが東洋の美德であるなんて、そんなことを考えなくて、大いに笑って喜んで結構です。ストイック的な「アパテイヤ」なんて――パトスを否定しているのを「アパテイヤ」という――そんな必要はない。どうぞ、子どもらしく喜びを大いに表わして、

「あの人を見てみると、何だかうれしくなってしまうな」

というような人になってください。特に女の方が、そういう質の微笑みをなくなしたら、女の人はダメだよな。

### ●受けるか、受けないか

シメオンというのは、イスラエルの約束のことを祈って待っていた人です。

<sup>25</sup> 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔<sup>けいけん</sup>にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。

この「慰め」という言葉は「慰めよ、慰めよ」という、イザヤ書40章や49章によく出てくる。聖霊その上に在<sup>いま</sup>す。<sup>26</sup> また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、

「今日はもう、喜びの世界に入らなくては私はここを去るわけにはいきません」と、皆さんはそういうつもりで今、臨んでいきましょうね。

<sup>27</sup> 此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例<sup>しきたり</sup>に遵<sup>したが</sup>いて行わんとて来<sup>きた</sup>りたれば、<sup>28</sup> シメオン、イエスを取りいだき、神を讃<sup>ほ</sup>めて言う、<sup>29</sup> 『主よ、今こそ御言<sup>ごことば</sup>に循<sup>したが</sup>いて僕を安らかに逝<sup>ゆ</sup>かしめ給うなれ。

シメオンは、

「もう私は見るものを見てしまった。迎えるものを迎えてしまった。もうわが望みは満たされたり。いつ逝つてもいいですよ」

と。そういうシメオンです。

<sup>30</sup> わが目は、はや主の救を見たり。<sup>31</sup> 是もろもろの民の備え給いし者、<sup>32</sup> 異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』



「光、光」という言葉が出てくる。何度考えても、この聖霊の、神の福音の、キリストの世界は、あのダマスコ途上で現れたキリストも、もの凄い光をもつて現れた。変貌の山でもそうです。普段は何も光のないような顔をしているけれども、実は時あつてかもの凄く輝く。

<sup>33</sup> かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、

だから、マリヤもまだ、いいかと思うとまたちよつと、あんまり次元のちがつたものが現れているものだから、マリヤもまだちよつと戸惑っているところがあるんだ。

<sup>34</sup> シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起<sup>た</sup>たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。

キリストは、傍観を許さない人である。キリストは、これに対して傍観的に三人称的に、

「キリストはどういう人でしょうか」

なんて研究したつてどうにもならん。イエスという人は研究の対象ではない。

「受けるか、受けないか」

というそういう相手なんです。だから、

「どうもあれば、福音の世界は困ったな」

と言つて逃げていくのは倒れてしまう。

「いや、実にこれは本当だ」

と言つて、その前にまず倒れる人は立たされる。「俺は」と言つて立っているやつは本当は逆に倒される。ところが、

「これは参りました」

と。剣道でも茶道でもそうだよ。本当の達人の前に立つと、参つてしまう。果たし合いをしようと思つたが、どうもケタがちがう。「おみそれしました、参りました」と。剣道の名人が茶道の達人の前に頭を下げた有名な話がある。何の道でありまして、その道に本当に達すれば共通なものがある。

それは量的にはない。質的なんです。どこまでも私たちは質的にです。楽しくてしょうがない。聖霊を受けると、どなたでも、どんなに中途でありまして、質的には達するところまで達しうんです。現象的にはまだまだ未熟であつても、質的にはちゃんとその達すべきところが約束されているものがあらわれている。そういう生き方をしなかつたら、人生はつまらんですよ。一人も例外なしに神品です。そういう意味において我々自身が神品にならなくては。

### ● 言い逆いを受くる徴

<sup>34</sup> シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起<sup>た</sup>たん為に、





そういうわけで、

「立つか、倒れるか」

ということ。私たちは本当に神の前に平伏す。私は形容詞で言っているのではないですよ、「平伏す」ということは。たとえ立っていても、魂は平伏しでなければいけません。ただ姿だけ平伏したって、

「そのうちに起き上がる」

なんてのはダメですよ。本当に神の前に倒れ平伏しているものは立たされる。「俺は」と言っただけ立っているやつはみんな倒される。

また言い逆いを受くる徴のために置かる。<sup>35</sup>――剣なんじの心をも刺し貫く  
べし――これは多くの人の心の念の顕れん為なり』

「言い逆いを受くる徴」というのはイザヤ書8章に出てくる。イザヤ書8章9節から15節のところを読むと、そういう事態が書いてある。キリストは、言い逆らわれる。

福音と文化は相反する。だから普通、

「福音はまあよしておこう。文化の方がいい。恰好がいい」

なんてね。恰好のいいものばかりを今は世の中の人は求める。福音は恰好がわるいからです。ところが、この恰好のわるい福音を、次元のちがったこの福音を、

「ちよつとこれは恐いな。あまりどうも感心しないな、あんな祈り方は」

なんてね。そんな現象でもって本体の世界を忘れていような判断の仕方をやっている。しかし、これを本当に受けとらなければ、文化なんてものは生きてこないんです。そういった逆説的な関係の中に本当のものが、本当の有機体的な関係があることをしらない。エラスムスは文化を積極的に肯定した。ルターは文化を否定し、福音を肯定してかかったから、あれから近代文化の基礎を築いた。近代文化の展開はルターの福音によって始まったわけだ。この事実が証明しているではないですか。

人の媒介を通さなければ本当のものにならない。自分が本当によつて倒れて、いや実にキリストの十字架でぶつ倒される。自分でぶつ倒れるなん思ったらダメですよ。砕けなんて言っただけで、自分で砕けたつもりだったらダメです。いくら砕けたつもりだって、本当の砕けには来ないのだから。キリストの砕けだけが私たちに本当の砕けを与えている。それから砕かれていくんだから。

この福音の「言い逆らいの徴」。全く、生れつきの我々には何かちよつと味がわるいんだよ、この福音というのは。まあ、私は初めて聖書を読んだときに、

「これはとんでもない本だな」

と思った。ずっと来ないんだよね。ところが、今はもうすーすー来てしまつて困る。それはその世界に入ってしまうと、今度は、老子を読もうが、イスラム教のものを讀もうが、ウパニシャットを読もうが、何を読もうが、これが読めてくるから不思議なんだ。これは



聖霊が来なかったら、福音なんて言ったってそれは読めませんよ。

「あれは十字架がないじゃないか」

と、すぐそういう妙な判断をする。そんなことではない。こういう貫きと包摂を持ったものはもう説明できないです。この「言い逆らいの徴」が実は、一切を完全に成就するところの、円現させるところの徴であつた。もう皆さん、確信を持ってくださいよ、本当に。

今の若いご連中が私の言うことをバカになつて聞かないものだからね。自分の判断で聞いているものだから、なかなか入つてこない。もういい加減でD大学には愛想をつかしてしまふ。どうして、バカにならないのだろうね。私は本当に簡単ですから、もう内村先生には「はい」と言つて一時間目から感激して聞いていた。そうしたら、とにかくぐんぐん進むものね。そして今度は逆にみんな包摂するような世界に入つてしまふ。事実、私が証明していますから、こんなやつが。

どうぞ、皆さん、ばかされたと思つて、ばかになつてくださいよ。そうしたらば、大愚は大賢に通じてしまったことがわかるから。大愚は大賢に通じていた。いい加減な小賢とはちがつた。本当の賢というものは、悟りというものはここにあつた。仏教の悟り以上の悟りがこの福音の中にあつたということですよ。

これでもう正直、世界の歴史を二つに割つてしまつたから。そして、

「天国か、地獄か」

ということをはつきり、自分自身をもつて挺身して示しているものが、これがナザレのイエス・キリストである。このイエス・キリストを受ける者は本当に天界に入る。これを拒む者は地獄へ行くよりか仕方がない。

「救いはこの他に来てないぞ」

と、ペテロがはつきり、使徒行伝でも言つていっているとおり。パウロも叫んでいるとおり。これは世界の果にいたるまで、どんなに人類が墮落しようが、必ず福音は勝つ。神の国は勝つていきます。それだけの本当の平伏しの魂がこの権威をもつてものが言えるんです。

かくキリストに平伏させられ、キリストに立たしめられたる者。かくして、キリストを本当に内に宿したるもの。このクリスマスは、降誕は、いずこに降誕したか。ベツレヘムの馬槽に。いや然り実に、あなた方一人ひとりという馬槽の中にキリストは降誕したのである。あなた方一人ひとりがこの馬槽となつてキリストを迎えたところに、必ず、私たちは本当に無我とされ、また本当にキリストと――キリストフォロスというのはキリストを担いだ男だよな、そのようにしてキリストに担がれ、キリストを担ぐという――本当にキリストと内的関係になつて、私たち自身が即ちキリストの徴そのものとなつて進んで行きます。

